

この物語に登場する本

『コンビニたそがれ堂』（ポプラ文庫ピュアフル）村山早紀著 ポプラ社

走^{はし}って
い^いくよ

松^{まつ}本^{もと}聰^{さと}美^み



学校の帰り、バス通りを早足で歩く。前に行くのは同じ六年一組の大月さんたち三人。キャツキャツと、ここまで笑い声が聞こえてくる。大月さんたちグループは、いつもパツと花が咲いたみたいに華やか。

「さよなら」

わたしは、三人を追いこしていく。

(今日こそ真衣ちゃんからメールが届いているはず)

真衣ちゃんとは幼稚園のころから大の仲よし。でも夏休みが始まってすぐ、真衣ちゃんはお父さんの転勤で、イギリスに引っ越してしまったんだ。二か月前のことだ。

出発の日、真衣ちゃんはわたしの手をにぎっていった。

「メールやスカイプで、今まで通りおしゃべりできるよね」

スカイプは時差があるから一回したきり。でもメールは、真衣ちゃんから毎日の

ようにきた。「さびしいよう、綾香に会いたいよう」って。

だのに、もう十日もメールの返信がないのだ。

(どうしたんだろう。病気かもしれない……)

どんどん足がはやくなる。

「竹内さん」

「竹内綾香さん」

後ろで声が出た。ふりむくと、大月さんたち三人が走ってくる。大月さんのピン

クのキュロットがひらひらゆれている。

大月さんは、わたしの前でトンと止まった。

「あたしたち明日、パピコの土曜セールに行くの。いっしょに行かない?」

「えっ、わたし?」

三人がそろってうなずいた。パピコは最近、駅前にできたファッションビル。おしゃれ大好きな三人が、わたしをさそうなんてふしぎ。わたしの髪はずつとショートボブ。服はパンツにTシャツ、パーカーをはおるとというのが定番なのに。

東さんがツイントールをなでながらいう。

「真衣ちゃんがいなくなつて、竹内さん、ひとりでしょ。だからみんなでさそおうつ

て」

「はじめな竹内さんと、あまえんぼ真衣ちゃん、いいコンビだったのね」

そういつたのは、いつもどこかにフリルのついた服を着ている松田さん。

大月さんが、みんなを見まわした。

「これで十月のバス遠足、ふたりずつすわれるね」

あ……そういうことか……と、思った。

「明日は、ママとおでかけするの。ごめんね」

気がついたらいつていた。

「じゃあ、しかたないね。またこんどね」

大月さんは明るい顔で手をふつてくれた。わたしも手をふりかえして歩いていく。

(ひとりなんかじゃないのにな)

空を見あげて、遠くの真衣ちゃんに声をかけた。